

福津ふしぎ発見



古墳の上に供養塔

古墳は豪族のお墓とされていますが、新原・奴山古墳群には、古墳のひとつに鎌倉時代の彫刻のある石柱がいくつも立っています。



▲「願共諸衆生 往生安楽園 文永11年8月日改立」と書かれた石柱もあります

世界文化遺産に登録された「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群の新原・奴山古墳群は、5世紀から6世紀に造られました。中でも21号墳は、5世紀前半に造られた直径17mの円墳で、その上には1mほどの石柱が人の手によって14基立てられています。そのうち彫刻された8基は「新原の百塔板碑」と呼ばれており、県の有形文化財に指定されています。この石柱は、13世紀に2・5km離れた渡半島付近から運んだと考えられ、古代インド文字の梵字や観音菩薩などの仏像が描かれています。石柱の素材が固く風化が少ないため、今でもはっきりとした彫刻を見ることができ、建立の理由は平家一族の霊を弔うためとも、蒙古襲来の戦死者の供養のためとも言われています。当時の人もここがお墓だと知っていたのかもしれない。

